

カレライス（重松清）

井上 小夜、加藤 修治、中山 莉麻、野田 奏惠



一 作者と作品について

重松清は、一九六三年に岡山県久米郡久米町（現・津山市）に生まれた。中学、高校時代は山口県で過ごし、早稲田大学教育学部国語国文学科を卒業した。角川書店で編集者として務めた後に、フリーライターとして独立した。作家となつてからは、父親の転勤で家族で九回の引っ越しをした少年時の実体験などをふまえ、いじめや親子の断絶、夫婦の齟齬といったシリアスな問題を描き続けてきた。一九九一年に『ピフォア・ラン』で作家デビューを果たし、その後『ナイフ』で坪田譲治文学賞、『エイジ』で山本周五郎賞、『ビタミンF』で直木賞を受賞した。『ビタミンF』はNHKでドラマ化もされている。少年の頃から吃音症であり、カ行の発音がうまくなかった。そのため、話すときはカ行から始まる言葉をできるだけ避けていたという。清という自分の名前についても、発音するのに苦労していたようである。

「カレライス」は、教科書のために書き下ろされたもので、後に、書籍として、『はじめての文学／重松清』に掲載された。子どもと親という親子の心情や思春期の子ども微妙な心情を読み取り、考えることのできる教材である。

二 叙述について

ぼくは悪くない。

自分の主張を前面に押し出している。自分に非が無いことを心底信じている。

言うもんか、お父さんなんか。

「言うもんか」という子どもっぽい言葉づかいで僕の幼さが表現されている。「なんかに」とあるので、お父さんを嫌がる気持ちが分かる。僕とお父さん、という対峙している関係性が表れている。

「いいかげんに意地を張るのはやめなさいよ。」

周囲から見ればこのけんかの原因はつまらない内容である。しかし、そんなつまらない内容であってもぼくにとっては大きな問題である。

お母さんはあきれ顔で言うけど、あやまる気はない。先にあやまるのはお父さんのほうあだ。

「先に」とあるので、前文で謝る気はないと言っていた僕だが、内心は謝らないといけないと思っていることが分かる。

確かに、一日三十分の約束を破って、夕食が終わった後もゲームをして

いたのは、よくなかった、だけど、セーブもさせないで、いきなりゲーム機のコードをぬいて電源を切っちゃうのは、いくらなんでもひどいじゃないか。

「確かに」という前置きがあることで、僕も自分の非を理解し、認めていることがわかる。しかし、「いくらなんでも」とあり、それ以上にお父さんのことを責めたい気持ちが強いことが読み取れる。

「何度いつても聞かなかったんだから、しょうがないでしょ。今夜お父さんが帰ってきたら、ちゃんとあやまりなさいよ。いいわね。」

「何度いつても」とあり、僕に自分も悪かったのだということを感じさせようとしている。念押し「いいわね」からは、母のあきれが伝わる。

お母さんはいつもお父さんのみかたにつく。

「いつも」という言い回しから普段から僕が母と父が連携していることにすねているような印象を受ける。実際は常に母が父の味方についていることはないだろうから、思春期の少年らしい感情なのだろう（自分は悪くない、という気持ち）。

丸一日たっても「ごめんなさい。」を言わなかったのは新記録だった。

今までとはちがって長期間口をきいていない状況を表現して、「お父さんウィーク」へと導入していく。

「いい。今夜のうちにあやまって、仲直りしときなさいよ。あしたから『お父さんウィーク』なんだから、けんかしたままだとつまらないでし

よ、ひろしだつて。」

「今夜のうちに」という時間制限を与えることによって、早く仲直りしないとどんどん謝りにくくなっていくよ、と母は言外に急かしている。また、その時間制限により「お父さんウィーク」がしんどくなるということが強調されている。それによって、読者に「お父さんウィーク」に対する興味を持たせることもできる。

毎月半ばの一週間ほど、お母さんは仕事がいそがしくて、帰りがうんとおそくなる。その代わり、お父さんが夕食に合わせて早めに帰ってくる。それが「お父さんウィーク」だ。

「お父さんウィーク」の説明。父母が協力して家庭生活を運営していることが読み取れる一文である。

「お父さん、ひろしがよくないことをしたらしかるけど、ひろしのごとが大好きなのよ。分かるでしょう。今朝も、『ひろしは、まだすねてるのか。』って、落ち込んだのよ。」

けんかの当事者ではなく第三者の母から与えられる情報には父も反省しているとある。母がぼくを納得させようとしている様子が感じられる。

ほら、そういうところがいやなんだ。ぼくはすねてるんじゃない。お父さんと口をききたくないのは、そんな子どもっぽいことじゃなくて、もっと、こう、なんていうか、もっと――。

子ども扱いを嫌がる僕の様子を示すことで、よりいっそう僕の子どもっぽさが表れている。後半部分では思いを言葉で言い表せない感覚

が伝わってくる。怒っている理由がゲームに関することだけではないのでは？と読み手に思わせる一文。

『特製カレーを食べれば、きげんも直るさ。』って張り切ってたから、晩ご飯の前におかし食べたりしないですよ。」

父が息子の様子をとても気にしていることがわかる。

六年生になったのに、遊んでばかりで家のことちつともしないんだから、まったく、もう——。

普段ぼくは遊びまわって手伝いをあまりしない。いわゆる普通の小学六年生の男の子のイメージを受ける。

お母さんはいつだって、お父さんのみかただ。

同じ文章を繰り返かえすことで強調している。

それがくやしかったから、何があっても絶対にあやまるもんか、と心に決めた。

父が正しいから母が味方している、と考えるのではなく母は無条件に父の味方をすると感じて悔しく思っている。「心に決めた」ということは、これまでの母とのやり取りなどで謝ろうかと心が揺らいでいたことも示している。

「お父さんウィーク」の初日、お父さんは、さっそく特製カレーライスを作った。

「ほら食べろ、お代わりたくさんあるぞ。」

と、ご機嫌な顔で大盛りのカレーをばくつく。

父が仲直りしたがっているのがとても良く伝わってくる。僕が不機嫌だから余計に明るく振舞っているだろう父の様子が描かれている。

でも、お父さんは料理が下手だ。じゃがいもやにんじんの切り方はたためだし、しんが残っているし、何よりカレーのルウが、あまつたるくてしかたない。

後にキーワードとなるカレーの辛さについての記述が出てきている。後半部への伏線ととらえることができる。

カレー皿に顔をつっこむようにしてスプーンを動かしていたら、お父さんが、「またおこってるのか。」と、笑いながら言った。

「顔をつっこむようにして」とあるので、父の顔を見ないようにして食べている。気まずさを感じているのだろう。父が笑っているのは自分はもう怒っていないと伝えるためではないか。

「ひろしもけっこう根気あるんだなあ。」

根気とは、ちよつとちがうと思う。どっちにしても、返事なんか、しないけど。

父の解釈とぼくの中での怒りの解釈とが異なっていることから、ぼくは父が僕を理解してくれていないと感じている。

最初の予定では、これでぼくもあやまれば仲直り完了。——のはずだったけど、ぼくはだまっただまっただまっただ。

ぼくの中での「予定」はいつごろから考えられていたのか？一度心

が揺らいだと考えられる母との会話の中だろうか。ぼくが考えていた「予定」とは違う感じで父が謝ってきたのかもしれない。

「でもな、一日三十分の約束を守らなかったのは、もっと悪いよな。」

説教したいところだが、説教っぽくならないよう軽い言い回しを心がけている感じがする。

でも、分かっていることを言われるのがいちばんいやなんだってことを、お父さんは分かってない。

自分が悪かったことをすでに認めている。父と子の間で微妙な感覚のズレが生じていて、理解してもらえていないと思っている。

「で、どうだ。学校、最近おもしろいか。」

父は、話題を変えて、どんな内容でもいいからぼくと会話をしようとして努力している。

ああ、もう、そんなのどうだつていいじゃん。言葉がもやもやとしたけむりみたいになって、むねの中にとまる。

単純な怒りよりもやもやとして消化しきれない感情が胸の中にかきあがる感じをぼくの年齢らしい言葉で説明している。

知らん顔してカレーを食べ続けたら、お父さんもさすがにあきらめたみたいで、そこからはもう話しかけてこなかった。

「もう」とあるので、それ以上は話しかけてこなかった。

「お父さんウィーク」の初日は、そんなふうにおしゃべりすることなく終わった。

初日が終わって「しまった」という感じを受ける。

ふつうのカレーだと、一晚おくとこくが出ておいしくなるけど、特製カレーのあまったるさは変わらない。

カレーの甘さに不満が募っているように書かれている。父の作った特製カレーへの不満ということから、父への不満も消えていない。

「なあ、ひろし、いいかげんにきげん直せよ。しつこすぎないか。」

お父さんは、夕食のとちゅう、ちよつとこわい顔になっていった。

「ちよつと」とあるので、本気でこわい顔になったわけではない。父ももどかしい思いを感じて、じれったく思っていることが分かる。

ここであやまると、いかにもお父さんにまたしかられそうになったから——みたいで、そんなのいやだ。

本当に反省しているならば謝れるはずだが、悪かった、という感情よりも自分の意地や怖がって謝ったと誤解されたくないという思春期ならではの思考回路がぼく自身の言葉で描かれている。「みたいで」や「いやだ」といった子どもっぽい言葉を用いていることで余計に思春期の葛藤が伝わってくる。

お父さんはのひらをメガホンの形にして言ったけど、ぼくがだまったままなので、今度はまたおっかない顔にもどって、

「いいかげんにしろ。」

とにらんできた。

さきほどは「ちょっとこわい」顔だったけれど、今度は本気で怒っている。それにぼくも気付いている。

おいしくないのに、ぱくぱく、ぱくぱく、休まずに食べ続ける。

「のに」とあるので、美味しいか美味しくないかが問題なのではなくて、父と会話したくない、というぼくの気持ちが行動に表れている。

自分でもこまってる。なんでだろう、と思ってる。今までなら、あっさり「ごめんなさい。」が言えたのに。もつとすなおに話せてたのに。特製カレーだって、三年生のころまでは、すごくおいしかったのに。

怒っている父を目の前にして、自分の非を認めているが、自分の気持ちの変化に自分自身がついていけずに混乱している。

二人でだまってお皿を片付けているとき、お父さんは、

「頭が痛いなあ。」

とつぶやいて、大きなくしゃみをした。

かぜ、ひいたんじゃないのー。

薬を飲んで、早くねたほうがいいんじゃないー。

言いたかったけど、言えなかった。

父の言葉から父の体調を心配している、つまり、父のことが気がかりである。だが、意地を張ってしまっているので素直に言い出せない。

翌朝、自分の部屋から起き出したぼくといれかわるように、お父さんは、

「悪いけど、先行くからな。」

と、朝食も食べずに家を出て行った。「お父さんウィーク」では、よくあることだ。

会社から早く帰ってくる分、朝は一番乗りして、ゆうべできなかった仕事を片づけるのだ。

お母さんはまだねている。これも、「お父さんウィーク」のいつものパターン。

仕事がいそがしい一週間のうち、特にいそがしい何日かは、家に帰るのが真夜中の二時や三時になる。その代わり、次の日はふだんより少しだけゆっくり出勤すればいいのだという。

父と母とぼく、この三人の普段の関係性なども読み取れるようになってきた中盤になって、「お父さんウィーク」に関する詳しい記述が出てくる。両親の支えあう姿や、忙しい中からもぼくのことを二人がどれほど大切にしているかということも読み手の目線からは考えることができる。

黄身がくずれているから、お父さんが作ってくれたのだろう。

「朝食も食べずに」出て行った父がわざわざ僕のために作ってくれている。黄身がくずれているのにそれに対する文句がなかったり、作って「くれている」という表記がなされているところから、父への怒りはもう残っていないことが分かる。

それがいつもくやくやくして、でも、お父さんがねむい目をこすりながら、ぼくのために目玉焼きを作ってくれたんだと思うとうれしくて、でもやつぱりくやくしくて、そうはいつでもうれしくてー。

「自分の行動を振り返り反省できるほどの時間の経過があったことを示している。また、それだけ長期間父と口をきいていないことがここでもう一度表面に浮かぶ。」

絵の得意なお母さんは、しょんぼりするお父さんの似顔絵を手紙にそえていた。

今回のけんかでは第三者である母が二人の仲を心配していることが改めて感じられるので多くの反省はより深まる。上手な絵によって、しょんぼりしている父の姿がよりいっそう想像しやすくなる。

言える言える、だいじょうぶだいじょうぶ、と自分を元気づけた。

自分で自分を元気づけないとならないほど、謝ることに対して不安を持っている。(予定どおり謝れなかったから?)

お父さんがそう言ったとき、思わず、ぼくは答えていた。

「思わず」とあるので無意識に、とっさに答えた。意地や怒りよりも父のことを心配する気持ちのほうが大きい。

「何か作るよ。ぼく、作れるから。」

「えっ。」

「だいじょうぶ、作れるもん。」

繰り返していることで自分に言い聞かせている感じもある。子どもっぽい言葉でのやり取りなので、意地などを忘れて心底から父を心配していることがわかる。

お父さんは、きよんとんとしていた。でも、いちばんおどろいているのは、ぼく自身だ。

口をきくことすらままならなかったのに思いがけない言葉が息子の口から出てきたことに父はきよんとんとしている。その姿を見て、自身自身の言動を自覚したぼくはもつと驚いている。

「いや、でも——。」

といいかけたお父さんは、少し考えてから、まあいいか、と笑った。

息子からの思いがけない申し出に思わず笑顔になった。

「でもカレーなの。いいからカレーなの。絶対にカレーなの。」

子どもみたいに大きな声で言い張った。

父との思い出がカレーと結びついている。思わず一気に畳み掛けるように言ってしまった自分が恥ずかしい。

戸だなから取り出したのは——甘口。お子さま向けの、うんとあまいやつ。

ついさきほどまでの父とぼくとの確執をここでもう一度思い出すきっかけとなる。しかし、あのときはぼくにとって苛立ちのひとつの原因でもあった甘口を今は穏やかな気持ちで見ることができている。

お母さんが、

「ひろしはこっちなね。」

と、ぼくのみだけ別のなべでカレーを作っていた低学年のころは、ルウはいつもこれだった。

低学年の幼かった自分を振り返るぼくの姿を描くことで、ぼくがだんだんと内面的にも成長してきていることを示しているのではないだろうか。

「だめだよ、こんなのじゃ。」

ぼくは戸だな別の場所から、お母さんが買い置きしているルーを出した。

ぼくにとつては甘口ではものたりない。ただの味覚の変化だけではなくて精神的な変化も暗に表している。

「だって、ひろし、それ『中辛』だぞ。からいんだぞ。口の中ひひひしちゃうぞ。」

父の中ではまだぼくは甘口が似合う子どものままである。

「何言ってるの、お母さんと二人のときは、いつもこれだよ。」

父は何もわかっていなかったことを改めて感じているが今はそれに對して怒りを感じたりはしていない。

お父さんは、またきよとんとした顔になった。

「きよとん」とあるので、父にとつてぼくが中から食べられるほど“大人”になっていたということは衝撃の事実だった。

でも、

「そうかあ、ひろしも『中辛』なのかあ、そうかそうか。」

と、うれしそうに何度もうなずくお父さんを見てると、なんだかこっ

ちまでうれしくなってきた。

先ほどまでは苛立ちやあきれられる気持ちばかりを父に抱いていたが、嬉しそうにしている父の姿を目にするとそんな気持ちを忘れて穏やかな気分になっている。

野菜担当のお父さんが切ったじゃがいもやにんじんは、やっぱり不恰好だったけど、しんが残らないようにしっかりとこんだ。

初めて父と二人で作った料理。その過程を説明することで二人の仲の良い姿が浮かびやすくなっている。

「いやあ、まいったなあ。ひろしももう『中辛』だったんだなあ。そうだよなあ、来年から中学生なんでもんなあ。」

と、一人でしゃべって、

「かぜも治っちゃったよ。」

と笑って、思いつ切り大盛りにご飯をよそった。

「お父さんウィーク」初日の大盛りのご飯とはぼくにとつて意味合いの違う大盛りのご飯。

食卓に向き合ってすわった。

「お父さんウィーク」の初日、二日目では全く意識していなかった「向き合って」という感覚をぼくが感じていることで二人の間の空気が変わっていることが改めて感じられる。

口を大きく開けてカレーをほお張った。

遠慮や気後れすることなく食事をしている。ぱくぱく食べていたと

きとは満足感がちがう。

ぼくたちの特製カレーは、ぴりっとからくて、でも、ほんのりあまかった。

思春期の心情を表すイメージのある味の表現。甘口は子ども、辛口は大人、という感じなので中辛⇨大人と子どもの中間にいるひろし、のイメージ。「お父さんウィーク」もはじめはぴりぴりとしていたが今はほんのりした空気感であることも表現されている。

三 考察

(一) ぼくと家族

この物語にはぼく、父、母の三人しか出てこない。そんなに分量もないこの物語の中でメインとして描かれているぼくと父のかかわりに関する記述はかなりの割合を占めている。

ぼくと父は普段仲が悪いわけではないことは、風邪ぎみのような父の姿を見てすぐに心配しているぼくの様子や、ぼくがなかなか口をきいてくれないからとしよんぼりしている父の様子から容易に想像がつく。また、お父さんウィークの説明の中からもわかるように一家三人は協力し合って生活していることもわかる。

この物語からは思春期にさしかかったぼくとそのぼくの様子に一喜一憂しながら親子の関わりあいを大切にしようとしている父、そしてその二人の姿を第三者的立場から見守っている母の姿を読み解くことができる。核家族化が進む昨今、三人家族も増えていることだろう。小学校高学年の児童たちも共働きの家庭で育った割合は決して低くない

いだろう。朝ごはんが作ってある嬉しさや母からの直筆の手紙の内容が胸にせまってくる感覚などは共感しやすいものではないだろうか。

六年生の教科書の冒頭に掲載されている「カレーライス」はぼくと家族のかかわりを通して自分自身の家族とのふれあいや自分自身の意地っ張りな部分、うまく言葉にできない複雑な心情などにも目を向けさせる機会となる作品でもある。

(二) ぼくとカレー

ぼくが風邪をひいている父のために作ろうと思いついたのはカレーであった。病人に適した料理とは思えないが、無意識のうちに思いついたということはカレーが、ぼくの中で父との思い出と深くかかわっているといえるだろう。

これもお父さんウィークではよくあることだ、などといった言葉が文中に出てくるようにぼくはお父さんウィークを何度も経験していることがわかる。また、特製カレーは小学校三年生以前から食べていることもわかる。つまり、ぼくと父の時間の中にはカレーが結構な割合で登場しているわけである。

そのカレーの辛さを父は甘口にして作ってくれている。しかし、ぼくにとつてそれではもう物足りなくなっている。その事実を父は知らない。これは、ぼくのことを父は何もわかってくれていないと感じている「ぼく」の成長を父が感じるきっかけへと繋がっていく。

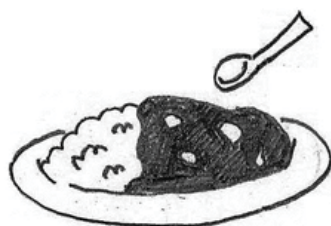
甘口から中辛へと好みが変わるのはぼくが成長している証であろう。父はそれを知って自分が思っていたよりもぼくはもう子どもではないとわかる。初めはけんかをしていて気まずかったお父さんウィークも、終盤ではほのぼのした雰囲気となっている。この二人の間の空気もカ

レーの「ぴりつとからくて」でも「ほんのり甘い」という記述と重ねて読み解くことができるだろう。

(三) ぼくと生徒

カレーライスの主人公であるひろしは小学校六年生。この教材で学ぶ児童たちと同じ年齢である。それだけでも児童たちは感情移入しながら物語を読むことができるのではないだろうか。ましてや、主題は親に対する子ども、小さなもやもやとした気持ちである。何だかきにくわいけれどうまく言葉にできない。その感覚を日常生活の中で小学校六年生の児童たちも多く感じているのではないだろうか。

自分の家族構成とは異なっている登場人物の家族構成であったとしても、共感しながら読みやすいテーマであることはまちがいないだろう。感情移入しやすい題材であると同時に家族間におけるこじれなどを解決させるヒントもちりばめられている作品である。



mnty